



「カリスマ」が職場を壊した日。

～私が「情熱」を捨てて「非情なルール」を選んだ理由～

有限会社吹田総業 代表 吹田克己

かつての私は「カリスマ気取り」の 経営者でした。

「理屈じゃない！気合と根性についてこい！」
そう叫んで先頭を走るのが、私のスタイルでした。

しかし今、私が大切にしているのは真逆の言葉です。
「データはAI、決断は社長」

このスライドでは、私の経営者人生で最も痛く、
恥ずかしい失敗についてお話しします。



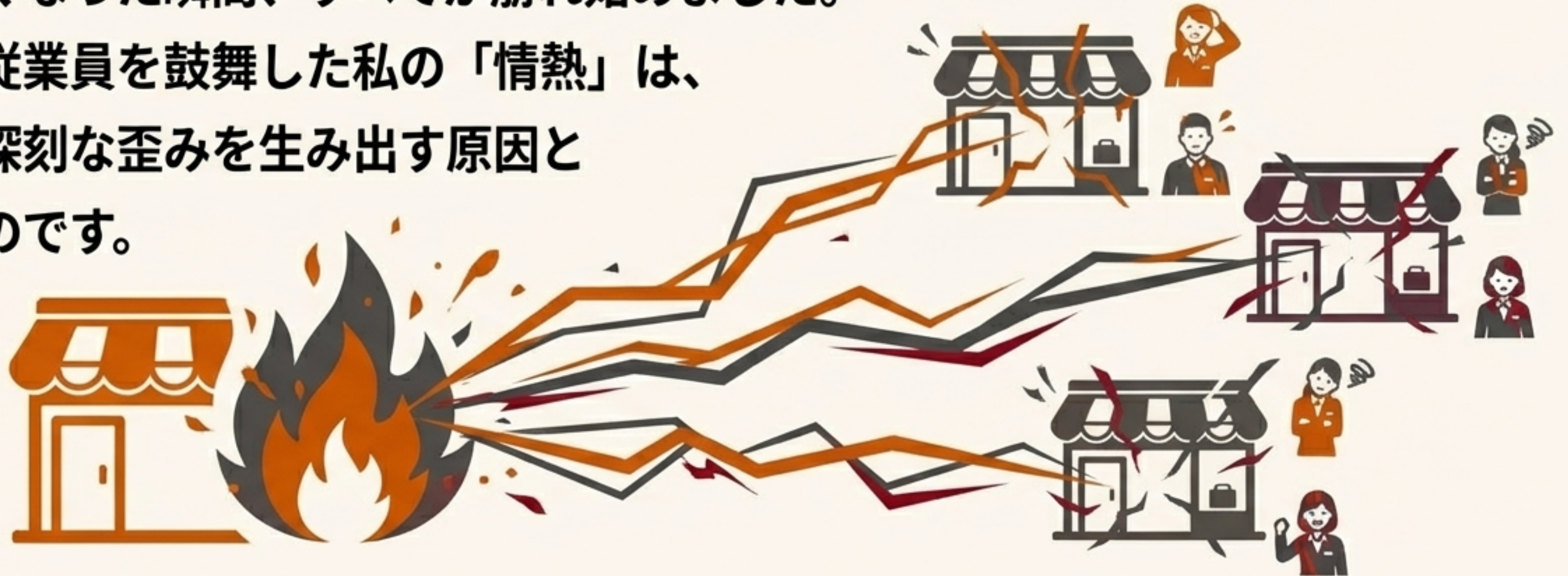
創業期、「情熱」は確かに機能した。

1号店は、それでうまくいきました。
私が常に現場にいて、その背中を見せることで、従業員は一体となってくれてくれた。
成功体験が、「自分のやり方は正しい」という確信を深めていきました。



しかし、事業拡大が「熱」を「凶器」に変えた。

複数店舗の展開。私の目が全従業員に行き届かなくなった瞬間、すべてが崩れ始めました。かつて従業員を鼓舞した私の「情熱」は、現場に深刻な歪みを生み出す原因となったのです。



「ブラックバイト」問題、深刻化

朝日

2010年代初頭、社会から 「悪徳経営者」の烙印を押される。

世の中で「ブラックバイト」という言葉が流行り始めた頃、
学生ユニオンから警告が届きました。「社長のやり方はかしい」と。

NHKや朝日放送など、大手メディアにも取り上げられ、
私は一転して社会的な批判の的となりました。

NHK

「ブラックバイト」問題、深刻化
朝日放送

悪徳スレーズ

「ブラックバイト」問題、深刻化

原因は「エコヒイキ」。良かれと思った行動が、不公平を生んでいた。

なぜこんなことになったのか？原因は、私の「エコヒイキ」でした。
一生懸命ついてくる子は可愛がり、そうでない子には厳しく当たる。

経営者の視点



信賞必罰

私にとっては「信賞必罰」のつもりでも…

従業員の視点



王様の気まぐれ

…従業員からは「王様の気まぐれ」にしか
見えていなかったのです。

私を泥沼から救ったのは、カリスマではなく「非情なルール」だった。



私を救ったのは、本部でも、私自身の力でもありませんでした。

それは、トラブルになる前に社労士と作成していた、冷徹なまでに書き込まれた一冊の「就業規則」でした。感情の入る余地のないルールが防波堤となり、労働局の斡旋も、驚くほど少額で解決できたのです。

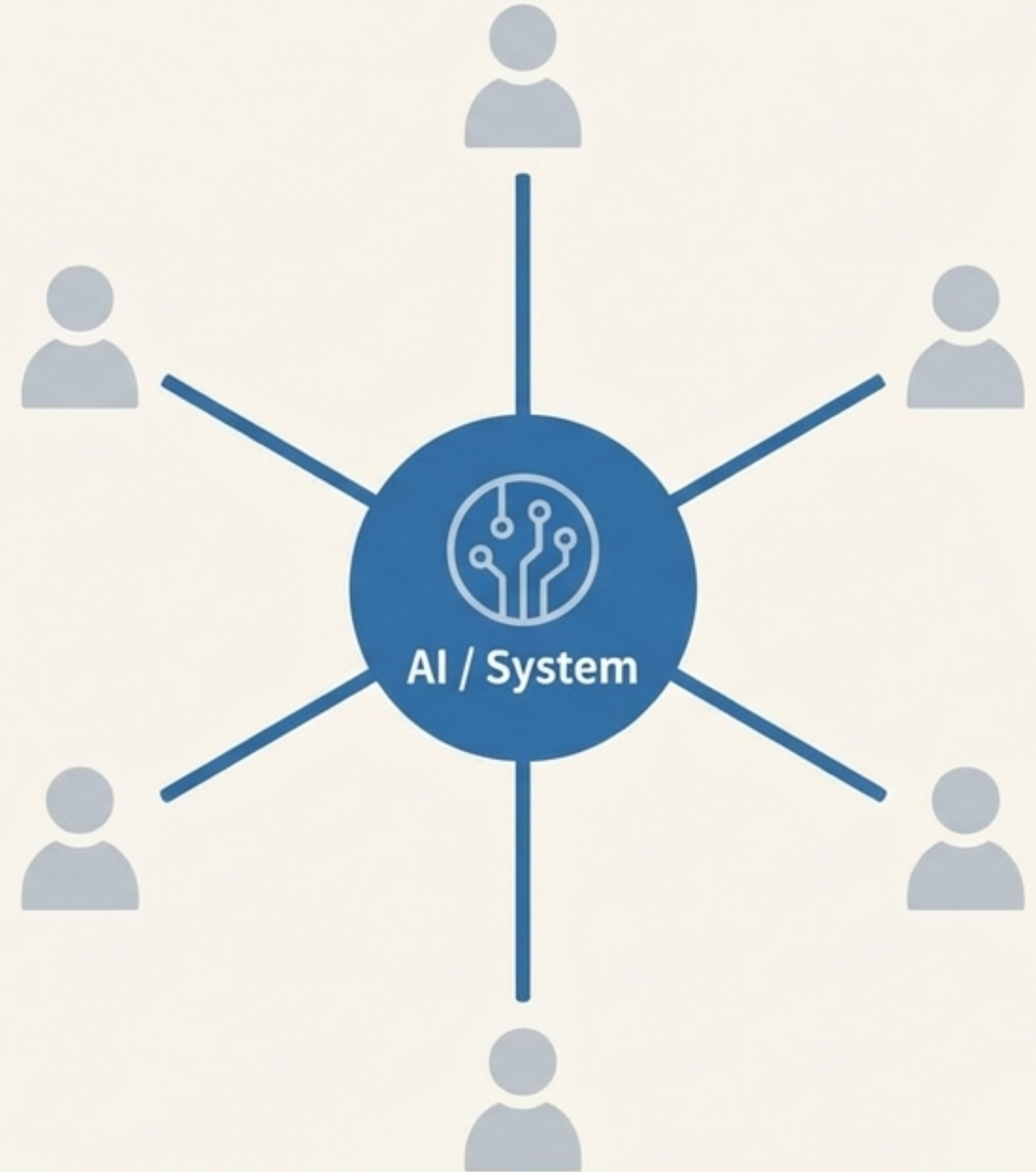
人間の「情熱」は裏切るが、
「ルール（仕組み）」は裏切らない。

なぜ今、私がAIやアプリ化を推進するのか？

ラクをしたいからではありません。二度と、あの時のような「不公平」を生まないためです。

AIは誰に対しても平等です。

社長の顔色も、好き嫌いも関係ない。客観的な仕組みこそが、従業員が本当に安心して働ける環境の土台となります。

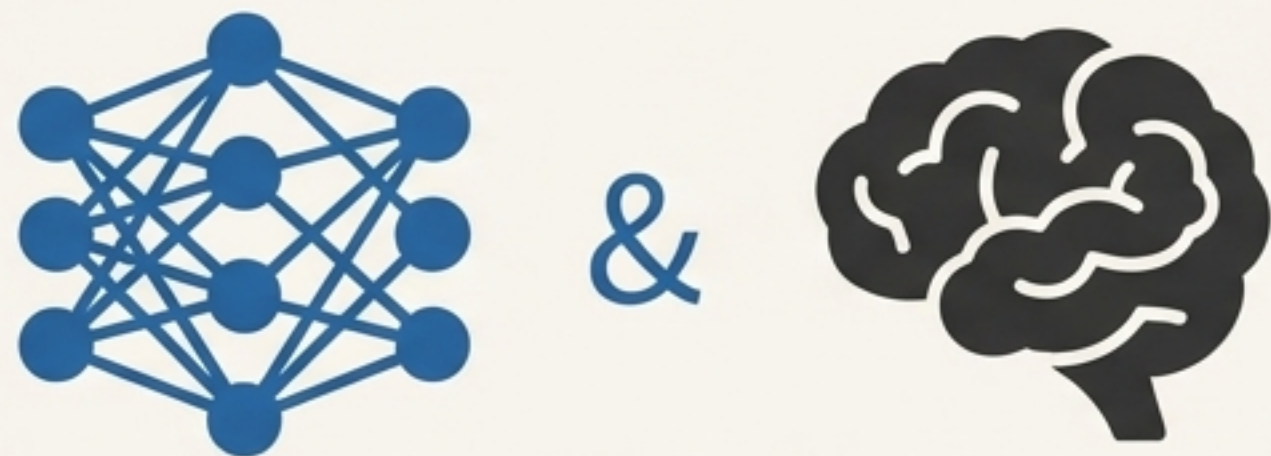




「熱い言葉」より 「公正なデータ」で、 従業員を守り抜く。

「冷たい社長」と言われても構いません。
私は、感情的な言葉で組織を動かすので
はなく、誰にとっても公平なデータと
仕組みで、皆を守ると決めました。
それが、私の失敗から学んだ、本当の
リーダーシップです。

我が社の合言葉



データはAI、
決断は社長。

この話の続き、よりディープな経営ノウハウはこちらで。

動画では語りきれないリアルな情報は、公式HPとNoteで発信しています。
この話が少しでも役に立ったと思ったら、チャンネル登録と高評価をお願いします。



公式ホームページをチェック



Note「社長の着想日誌」を読む



YouTubeチャンネル登録